

温もりの輪廻

パリッと揚がった三度豆の天ぷら
冬の外気に冷えたみかん
旅の帰路、乗換駅で買う赤福
南座の余韻漂う祇園の六方焼き

父は好物を周りに覚えさせるのが上手だった

朝一番に開く新聞紙の匂い

幼い子らの頭の薫り

幼い頃には知る由もない父の楽しみゆえ
妹の頭を包み、満足げに嗅ぐ父の姿を思い出す

幼子らは分かるまい

自ら発するその爽やかな英気を

幼子らに分かるまい

その儚き煌めきの優雅さを

父の掌を温めたものへの郷愁を抱きつつ

今日の歩みを進めねばならない

こぼれ落ちるいのちのかけらとの交換ならば
身に纏うものに麗しき優しさの衣を掴みたい
幼子が手を伸ばしたくなるような衣をこそ